日本統合医療学会 会報
IMJニュース
No.7
2012年7月15日発行

編集・発行　一般社団法人日本統合医療学会広報委員会 委員長　川嶋みどり　〒113-0023 東京都文京区向丘1-6-2
TEL：03-3812-5030　FAX：03-3812-5167　URL：http://imj.or.jp/

巻頭言

学術団体として新時代の求める統合医療をめざして

仁田新一
日本統合医療学会（IMJ）理事長

東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所の事故は，被災地はもとより日本全体のあらゆる分野にさまざまな影響をもたらした。

医療分野に限ってみても，財源問題や人材不足，“求められる医療”の多様性等に対応する方法論などの脆弱さが浮き彫りとなり，復興への道のりもほど遠いことを感じないわけにはいかない。これまでの医療の概念を革命的に変えなければならない状況におかれているといってもよいだろう。こうした中，地球上に現存する医学や医療，すなわち，近代西洋医学や伝統医療（TRM），相補・代替医療（CAM）などを総動員した統合医療が世界的に注目されており，米国，中国，インド，韓国などにおいては，これを国家の医療行政システムに取り入れ，さらには国策でビジネス化しようとする動きもある。

日本統合医療学会は，渥美和彦前理事長の高邁な精神と実行力で学術面はもとより，経済界や政府，地方自治体に対する働きかけなどの社会活動をも精力的に行なってきた。

4月からは，これまでの成果をふまえて，学術面に焦点を合わせた活動は学会が，社会活動や政府等への働きかけは主に渥美名誉理事長を中心とした新たな組織でそれぞれ行い，この両者の活動を車の両輪として，一層強力に統合医療を推進・普及していくこととなった。

しかし，今日に至るまで統合医療の目的や内容が必ずしも医学界や社会の人々に対して明確に伝わってこなかったという反省もある。そこで，統合医療が国民の期待に添い得る医療システムであることを，もう少し“わかりやすい言葉”で伝えていく必要があると考えている。それは，現在の近代西洋医学の進歩を超えた進行癌や難病，生活習慣病，高齢者医療，心の病気などに代表される“人々の不安”を解消する上でも統合医療の方法論と具体的な運用法の開発と人材の育成は医療の世界的趨勢に鑑みても，次の医学の最重要課題の1つとして位置付けられるからである。

このような方向性が未だ復興半ばの被災地への施策としても有用であることは，震災発生直後から統合医療の名の下で鍼・灸，漢方，ヨーガ，アロマセラピー，音楽療法などの活動が被災地の住民に歓迎されて，受け入れられたことからも明らかである。今後はそれらの療法師・士と共に医師や看護師らも力を併せて，その安全性を担保しながらチーム医療・全人的医療を展開していくつもりである。たとえ最初は小さな活動であっても，それを脈々と地域で継続することこそ重要であると考える。

さらに，統合医療活動をもっと国民に近い信頼される医療として展開していくには，安全性と有効性に対する科学的評価法をはじめ，臨床的エビデンスを獲得するための方策を精力的に究める必要がある。その意味でも，かねてからの懸案事項でもある統合医療研究・実践施設としての役割を担う3つの『統合医療センター』建設に向けた活動を推し進めることが，それらの早期実現に繋がると確信している。

すでに，各自治体や民間の経済団体などの協力を得て，それぞれの企画は実現に向けて動き始めている。一日も早く現代の日本にマッチした統合医療を提供できる“場作り”を実現して，国民の健康・医療ニーズに応えたいと願っている。

認定施設紹介

医療法人社団水生会
柴田病院

柴田眼治
医療法人社団水生会 柴田病院
理事長・院長

■院長挨拶「統合医療の実践」

統合医療を知ったのは12年前，渥美和彦名誉理事長の日本医学会総会での特別講演を聴いた時だった。大学では消化器外科医として食道がん治療に従事したが，進行がんでは術後再発もあって，ターミナルケアに悩んでいた。がん以外の病気でも心身の苦痛やSpiritual painに苦しむ方々と共に闘病生活を経験するうちに現代医療の無力さも思い知らされた。その時に出会った統合医療については非常に新鮮で，医療に新しい展望が開けたと感銘を受けた。翌年，渥美先生を山口にお招きして，「21世紀は統合医療の世界」の講演を頂き当院スタッフや有志の方々と勉強した。今は九大病院長の久保千春教授にも「心身医学の現況」につきご講演頂いた。

平成16年10月30日には「JACT山口特別大会～医療と宗教の共鳴～」を開催し，渥美先生，阿岸先生，仁田先生などに講演を頂き，山口の医療者や一般の方々のご参加とご聴講を頂いた。この時に山口支部が認定され発足し，支部長として邁進している。

統合医療を自院や地域で行いながらWHOのいう「心と身体と魂のケア」の実践に励んでいるところである。

■施設紹介

当院は創立33年目の60床の一般病院です。大腸肛門病センターと人工透析センターを有し，外科，整形外科，内科，眼科を主として診療を行い，救急告示病院としても活動しています。

併設の介護老人保健施設は100床で，うち，認知専門棟は40床です。訪問看護ステーション，ヘルパーステーション，居宅介護支援事業所などが地域に出かけ活躍しています。

〒753-0215 山口県山口市大内矢田385
TEL083-927-2800 FAX083-927-5630
ホームページ http://park3.wakwak.com/~suiseikai/index.html

統合医療については，病院に隣接した鍼灸・整骨治療院が現代医療をカバーし，有効症例も多くみられます。院内ではアロマテラピー，動物介在療法，落語やマジックなどユーモア療法を中心に行なっています。心の悩みについても県下の寺院から交代で来院され禅僧などの宗教者によるお話が好評です。食事は薬膳バイキングが栄養科の創意工夫によって3か月に1回催され喜ばれています。高齢者の嚥下食の開発は県下の病院のトップクラスです。桜や紅葉の季節にはマイクロバスで，名所を巡っています。山，川，海にかこまれた立地を生かして大自然の癒しが実感されます。メンタルヘルスケアやスピリチュアルケアについては，医療者のアプローチは勿論なされますが，さらに近隣の神社，仏閣や聖堂を巡って患者さん個人の気づきも期待しています。

IMJ山口の事務局をつとめていますが，毎年1回，山口県統合医療学会が開催されます。県下のTM，CAMを行っておられる人たちが発表を行い，大変参考になります。

本年6月の総会で，漢方，鍼灸部会，ヨガ部会，アロマテラピー部会，動物介在療法部会と宗教者を中心とした祈りの部会が設立されました。部会ではさらに増えていきますが，本会では現代医療部会で日進月歩の先端医療につきエキスパートのDr.から発表して頂き勉強していくこととなりました。

東日本大震災では，2011年5月2日から8日までIMJ山口の有志5名が宮城県気仙沼市に医療支援を行いました。

さて，TMやCAMの世界は広大で深奥です。県内外を問わず講師をお招きして知識の吸収につとめています。当学会は一般の皆様にも公開講座となっており，多くの参加者があり，統合医療についての啓発と普及につとめています。

認定施設紹介

医療法人直心会
帯津三敬病院

帯津良一
医療法人直心会 帯津三敬病院
名誉院長

ホリスティック医学を追い求めて29年。いまだ1つの方法論としてのホリスティック医学を手にしてはいません。日暮れて道遠しの感を否めませんが，少しも悲観してはいません。なぜならば，こうして理想のホリスティック医学を追い求める日々がそのまま私自身がホリスティックに生きる日々であるからです。

作家の田口ランディさんが慰めてくれました。ホリスティック医学は形ではありません。患者さんを中心に家族，友人，そしてさまざまな医療者が織り成す場のなかで，それぞれがそれぞれの生と死の物語を展開していればいいんですよと。

その通りだと思います。

そして，生と死の物語を展開するための第一歩は生きる哀しみを理解することにあります。職員の1人残らずが生きる哀しみのわかる人になってくれることを切に願っています。

■施設紹介

ホリスティック医学を追い求める旅もほぼ最終章，最後の聖戦を挑むべく病院を新築移転したのが平成21年の4月。病院の北側と西側に広がる田園，特に田植えどき，水を張った田ごとに映える夕日か美しい。田毎の月とはこのことか。

玄関を入ると正面に，病院の理念「今日よりも良い明日」が輝いている。ホリスティック医学というものは性急に治った治らないの二極化を求めるのではなく，一歩前進の積み重ねですよ。それは地味なものなのですよということを訴えているわけである。

〒350-0021 埼玉県川越市大字大中居545番地
TEL045-235-1981 FAX045-235-8063
ホームページ http://www.obitsusankei.or.jp/index.html

その左手には「直心館道場」の木彫りの看板。気功道場の入口である。気功は終始，わがホリスティック医学の中軸を成してきた。

いまではおよそ130畳。50人が一度に太極拳が出来ることが自慢である。命名の由来は国学者賀茂真淵（かものまぶち）の

つらぬくに高き直き心をもてす。
かつその高きなかに雅びあり，直きなかに雄々しき心あるなり。

ここで日々さまざまな行事がくり広げられている。まず，患者さんのために一週間に15功法30番組の気功が用意されている。指導は病院の職員と患者会の世話人の人たちが担当する。

その患者会の定期的な会合がここで開かれ，私の「帯津良一『場』の養生塾」は毎週火曜日の午後。さらに「名誉院長講話」なるものも毎週金曜日午後開催される。

外科診察室の前の廊下も広々としている上に小鳥が飛び交う中庭が臨めて居心地がよい。私はここを自分の死に場所ときめている。

2階から4階までは病室。99床，全部個室である。私が入院するときは個室がいいという理由からである。

病院の建物が新しくなって人心も新しくなったということか，特に若手の職員の志が高くなり，病院という場の自然治癒力の高まりを感ずる昨今である。

寄稿

医療の原点 ヒポクラテス医学

中島旻保
中島カイロプラクティックセンター院長
Doctor of chiropractic 日本統合医療学会代議員

近年の世界の医学，とくにわが国の医学の進歩は目覚しいものがあるが，しかし医療に関しては他国に比べて二流に甘んじている。その結果，医学は進歩しても患者の数が減らないのが現状である。これはいったいどこに原因があるのだろうか。それは西洋文化・医療を日本に取り入れた明治時代にさかのぼる。

もともとイギリスから入ってきた西洋医学（近代医学）は，ミシェル・フーコーの『臨床医学の誕生』によると，18世紀末に生まれたという。医学とは単に病気による苦しみを和らげ，治療することが目的ではなく，すべての理性に基づく人間活動の基礎でなくてはならない。そのためには哲学を基礎としなくてはならない。そこで18世紀末からしばらくの間，医学教育は権威者による空虚な思弁や学説をただ伝えて解釈することに重きを置いていた。当時の臨床講義は，ただ自分たちが教え，それを患者に示し証明することにあった。すなわち近代医学のモットーである研究性や真理性による「科学」ではなく「哲学」を医学の代名詞にしていたのである。

1831年にイギリスで「科学保健協会」が設立されて以降，今日まで続く医学は「疾病の科学」となったようである。もっとわかりやすくいうと，物理学や化学が医学の最も有効な方法として取り入れられ，人間を機械（メカニズム）と見なした。しかし科学は全知・全能になり得ないということを認めず，現代の医師たちは科学をすべて用いて行うことこそ真の医学とした。そして，それ以外は非科学的と名づけて排斥した。

こうして近代医学のもととなってできた医学を日本は積極的に取り入れて今日の医学とした。それがそのまま実践的医学（臨床医学）として今日まで継続してきている。

しかし本当の医学はヒポクラテスがいう患者の身体において観察（見る・知る・触る）し，発見することにある。

ここで1967年後半，私が米国アイオワ州のPalmerカイロプラクティック大学に留学中の体験をご紹介する。私は健康維持のために韓国の空手（テコンドー）を習っていた。ある日，師範代の娘が高熱を出したため，Palmer大学の教授であるDr. Vern L Hagenのもとに電話が入り，すぐに来てほしいと往診の依頼があった。私はちょうどDr. Hagenのクリニックでインターンを兼ねて勉強していたので，一緒に往診に行くことになった。

師範代の家庭は子沢山で男2人，女3人の7人家族で生活はけっして裕福ではなく，半ば生活保護を受けていた。しかし末娘が40℃の高熱を出し，治療を受けるにもお金がなく，やむを得ずテコンドー仲間であるDr. Hagen（彼自身も数年前よりプラクティスしていた）に頼らざるを得なかったようである。

早速教授の助手を兼ねて往診に行ったところ，居間のソファーでぐったりした2歳の娘は高熱のせいか顔が真っ赤になっていた。Dr. Hagenはその子を仰向に寝かせて，盛んに，脈拍と後頭部の脳脊髄液（C.S.F）の流れをチェックしていた。そして次に環軸関節の可動性を確かめてからアジャストメント（調整）を試みた。その治療を5分おきに3回施したところ，40℃あった発熱が36.7℃に下がり，それまでぐったりして身動き一つしなかった2歳児が何ごともなかったかのように元気になったのには驚いた。

子どもの場合，成人と違い環軸関節，とくに環椎は脳から脊髄に通じる血流を調整している重要な椎骨であり，人間の身体をコントロールするメンテナンス（補正）の働きをする。幼児の場合全身の補正の80%以上が環椎の可動性に依存している。

第67回Liga国際ホメオパシー医学会大会

日時：2012年9月14日（金）～17日（月）
会場：奈良県新公会堂（奈良県奈良市春日野町101）
主催：一般社団法人 日本ホメオパシー医学会（JPSH）http://www.jpsh.jp/
◎参加申し込みはウェブサイトから（※http://www.jpsh.jp/lmhi2012/）

※招待講演・シンポジスト：世界を代表するホメオパシー医、獣医師など多数
※参加対象者はホメオパシーに関心のある医師・歯科医師・薬剤師・獣医師

【事務局】lmhi2012@issjp.com　/　TEL：03-3230-3599　FAX：03-3230-3725

ヒポクラテス医学では熱病（ピレトス）は体の成分としての体液の異常であり，環椎が脳脊髄液と頭部へ行く血液の流れを調整する補正作用を行っているとしている。環椎のアジャストにより，これがスムーズに働き，体に影響を与え，神経を含む働きを回復させて発熱を抑える結果となったようである。年齢が若ければ若いだけ野生のエネルギーの働きが強く“自然治癒力”が働くという医学論理をDr. Hagenによって実際に見ることができた。

このDr. Hagenの医療行為は私にとって衝撃的な出来事として記憶に深く刻まれることとなった。

大学の卒業を控えたあるとき，哲学の授業であるDr. Galen Priceが私に「カイロプラクティックのルーツはヒポクラテスにある」と教えてくれた。その言葉を立証するものとして学舎廊下の上部のあちらこちらに英語やギリシャ語でいろいろな箴言が掲げられていたのだが，そのなかに「人体は疾病に対して自然に回復する。医師はその回復する自然の力を補佐するのが天命である」というのがあった。これはまさしくヒポクラテス全集にある箴言の一部そのものである。

古代から世界のさまざまな民族や種族の手によって慰めと癒しの技芸（テクネー）として営まれてきた。これを記録としてまとめたのが“ヒポクラテスの箴言”である。病気をdiseases（複数）とするかdisease（単数）とするかである。前者は病気を局所的な複数のものと考え，後者は全身的なものとして重視したものである。

アリストテレスの著者「動物部分論」のなかに次のような記録がある。「体のそれぞれの部分は他の道具と同じで何かの目的，つまり何かの働きのためにあるのだから全体として体も何か複雑な動きのなかに存在する」。これがヒポクラテス医学の哲学であり，最近日本の医学界で注目され出した全体論としてのホリスティック的考え方に通ずるものだ。

時代は変われどわれわれは，ヒポクラテスの医学精神やソクラテスの哲学精神を現代社会に取り入れていき，自然のなかの人間として生きていかなければ，楽しい人生は送ることができないのではなかろうか。

寄稿

“統合医療は何処へゆくのか”

渥美和彦
一般社団法人日本統合医療学会
名誉理事長

統合医療をめぐる最近の動きは，急速に推進の方向へ活発化している。政府の与・野党といえば，それぞれ民主党と自民党が主軸であり，前者には鳩山由紀夫元総理を会長とする議員連盟があり，今春より数回の会議が行なわれ，当学会の役員が呼び出され，現状と問題点を報告している。後者にも，橋本聖子議員が座長を務める自由民主党政務調査会主催の会合がもたれ，私を含めた役員がヒアリングに応じている。厚生労働省の中に設置された「『統合医療』のあり方に関する検討会」も，われわれを含め関連する関係者のヒアリングが行なわれている。

一方，地域における活動が東北，九州，沖縄などにおいて活発化してきており，去る6月10日に沖縄（浦添市）で開催された統合医療に関する講演会は500人のホールが満席を超えて溢れ，盛況の裡に開催時間が1時間延長された。

このような活動に呼応して，学会も目標を，学術を中心とした学会と社会活動を広く行なうコンソーシアムの2つに大きく分け，前者の代表に仁田新一理事長，後者の代表に渥美和彦が就任し，二人三脚で統合医療を展開することとなった。

コンソーシアムは，統合医療を代表する学術の会を束ねる学術連合団体，市民レベルで推進する市民団体，それらを支援する企業・団体，さらにそれらを統括する運営

第67回Liga国際ホメオパシー医学会大会　市民公開講座

日時　：　2012年9月12日（水）
14時～16時
会場　：　メルパルク京都（JR京都駅前）
対談　：　美しく生きる『ホメオパシー問答』
草笛光子 vs 帯津良一
（女　優）　（医師・日本ホメオパシー医学会理事長）

講演　：「世界のホメオパシー」　川嶋　朗（東京女子医大准教授）
会費　：　無料・定員300名（大会ホームページから事前申込みが必要です）
（http://www.jpsh.jp/lmhi2012/）

部門から成り立ち，すでに本年6月に関連する学術連合団体の組織化に向けた基本合意がなされた。

以前から述べているように，東日本大震災によって人間の価値観が変わり，医療のあり方も変わった。それは，治療の医学から予防の医学へ，エネルギーを過度に消費しないエコ医学へ，さらに，自分の健康は自分で守るセルフケアの方向へ変わりつつあるといえる。これらの諸要素は，まさに統合医療の指向するものであり，統合医療こそが次の時代の医療といえる。

従来の学会の運動は，統合医療のコアとなるべき相補・代替医療CAMの補強と，発言力の拡大に重点が置かれたように思われる。

言うまでもなく，学会の活動は統合医療を研究し，応用する少数の集団のみでは，加速的な新しい展開はない。具体的に恩恵を享受し，統合医療の意義を実感する市民の参加が必要である。

このためには，近代医学に従事する医師の参加と，理論武装化，さらに学術諸学会との連携が必要となる。

コンソーシアムの意義は，そこにある。

そのためには，統合医療の強力な推進力となる若手の力が必要である。

最近，これらの若手諸氏による著書が多く出版されるに至ったのは誠に喜ばしいことである。

これらの著書を拝読し，いくつかの問題点があることが判ったので，ここで述べることにする。

1つ目は，統合医療は，近代西洋医学と伝統医学（TM）と相補・代替医療（CAM）などとの統合であるという基本姿勢である。

2つ目は，わが国の医療体制と欧米では異なり，その利用には多くの制約があるということである。

前者については，CAMのみで，あらゆる難病の治療が可能であるという発言は患者を動揺させることになるので，慎重にしていただきたい。

後者については，学会がこの約20年間に亘って国内外の実態を調査し，「日本型統合医療」について研究を重ねてきた。これによって得られた成果を踏まえて，これからも統合医療を国策として導入に当たり，向けた活動へ積極的に参加していきたいと考えている。

統合医療の推進は緊急を要する課題であり，東日本大震災の後，今後の医療のあり方が問われている現在こそ，普及・推進に向けた好機である。

統合医療を志す人々は今こそ小異を捨てて大同団結し，事に当らねばならないと考える。

事務局だより

<事業報告>

- 臨時理事会：4月17日（火）　場所：東京大学医学部研究棟　出席者：17名
- 定時社員総会および第1回通常理事会：5月21日（月）　場所：東京大学医学部研究棟　出席者：18名
- 認定および更新のための教育セミナー（総論）：6月23日（土）　会場：東京大学医学部研究棟　参加者：45名
- 認定および更新のための教育セミナー（各論）：6月24日（日）　会場：東京大学医学部研究棟　参加者：25名
- 分科会：6月26日（火）　場所：東京大学山上会館　参加者：12名

<事業予定>

- 症例検討会：8月5日（日）　場所：東京大学医学部研究棟
- 認定および更新のための教育セミナー（総論）：10月27日（土）　場所：東京大学医学部研究棟
- 認定および更新のための教育セミナー（各論）：10月28日（日）　場所：東京大学医学部研究棟
- 第16回日本統合医療学会：12月8日（土）・9日（日）　場所：大阪大学コンベンションセンター（吹田キャンパス）
- 第7回資格認定試験：12月9日（日）　場所：大阪大学コンベンションセンター（吹田キャンパス）

<お知らせ>

- 第2回認定試験合格者（2009年10月1日認定者）第3回認定試験合格者（2010年4月1日認定者），第1回認定試験合格者更新猶予者の更新は，2013年2月頃の予定となります。該当者には郵送にて申請書をお送りさせて頂きます。
- E-mailの登録をされていない会員の方は，HPの会員登録情報変更から登録をお願いします。住所変更などもHPから行なえますのでご利用ください。
- 8月1日から会員管理事務局が変更になる予定です。詳細は後日ご連絡致します。

文責：事務局長　河野 明正

編集後記

「男女の別なく襲う自然災害なのに，防災・減災や被災者支援，復興・復旧に関する計画は殆ど男性の手で作られている。男女ともに積極参加すべき」という某紙の社説，東日本大震災時に数名でまとまって避難した男性64%に対して女性は82%であったとか。この数字を見ながら本学会での女性の役割に思いを馳せた。男女で競い合う必要はないにしても，女性は確かに地域とつながる機会を多くもっている。各領域で力を発揮することと併せて統合医療の名を社会に広める女性会員の役割が自ずと明らかである。放射能問題解決の目途もつかず，膨大な復興予算の具体化も見えないまま，またも大雨による土砂災害の報に胸を痛めながら。（川嶋みどり）

広告掲載歓迎／広報委員長：川嶋みどり　広報委員：赤星義春　小野直哉　川原由佳里　濱崎浩一